

月刊 アートコレクターズ

Art Collectors

8
2026

アートで 幸せになる方法

対談

鏡リュウジ×田中久美子
西洋美術で考える“幸せ”

インタビュー

春日武彦 無意味を楽しむ
大岩オスカー 異なる文化を重ね合わせて

寄稿

読書猿 自分を読まないための読書



Room 1 | 関係の生成—鑑賞から参加へ Art Collective TeaRoom 集英社マンガアートヘリテージ×荒木飛呂彦「ジョジョの奇妙な冒険」
©Hirohiko Araki & LUCKY LAND COMMUNICATIONS / Shueisha Inc.



Room 3 | NEO WABI-SABI—静謐と過剰の肖像 古賀崇洋 © Matteo Losurdo

歴史の中で紡がれてきた日本の美を、アート／工芸の枠組みにとらわれることなく世界に発信するプロジェクト B-OWND。その活動は、SCOPE Miami Beach など海外アートフェアでの音楽ライブや茶会も取り入れた大規模な展示、EXPO 2025 大阪・関西万博でのグループ展など、一部上場企業である丹青社を母体とする強みを最大限に活かし、既存のギャラリービジネスとは一線を画した規模感で展開している。そして、現在開催されているヴェネチア・ビエンナーレ 2026 の公式サテライトイベント「Personal Structures」にて手掛けている企画展「Relational Logic—Beyond Dualism, a World Reconnected（関係の論理—二元論を超え、結び直される世界）」はその活動の一つの集大成ともいえる。日本文化の価値の再定義を掲げる B-OWND は、西洋文化の牙城ヴェネチアで何を指すのか。プロデューサーの石上賢に話を伺った。

—— 現在、ヴェネチアで開催されている企画展「関係の論理」は、B-OWND と特別に関係の深い6人の作家（今村能章、古賀崇洋、酒井智也、高橋賢悟、中村弘峰、四代田辺竹雲齋）の展示に加え、これまで精力的に取り組んできた他のジャンルとのコラボレーションとして、荒木飛呂彦『ジョジョの奇妙な冒険』と茶の湯をクロスさせた展示、さらには活動初期から行動を共にする Art Collective TeaRoom による茶会も実施されています。まさしくこの「関係の論理」がテーマにしているのはそれとは違い、全ての物事が自分に関係しているという意識を持つことで、自ずと調和に向かう世界観です。この見方が奇しくも象徴的に現れていたように思います。

また、会場である「パラッツォ・ベンボ（Palazzo Bembo）」は、ヴェネチア屈指の名門貴族ベンボ家の邸宅として、ルネサンス期には多くの文化人が集った場所です。中でも、ピエトロ・ベンボ（1470〜1547年）は、近代イタリア語の父として知られ、出版業界とも深い関わりを持っていました。今回、世界的にも高い評価を誇る日本のマンガとのコラボレーション展が実現したのは不思議な縁を感じます。

マンガも文学と対比され、芸術なのかそうでないのか絶えずジャンル分けに晒されてきました。しかし、現代の日本文化を象徴しているのはマンガに他なりません。世界中でマンガは読まれ、それを讀んだ世界中の子供達に夢と希望を与えている。クリエイティブとしてこれ以上の勝利はないのではないのでしょうか。このように「分別」によって人為的に作られてきた価値ではなく、そこから解き放たれることで、本質的な価値が浮び上がってきます。

工芸も、日本人が自然との繋がりの中で、ある種必然的に生み出していったもので、生活に根付いた実感に基づいていま

ユナ）によって体系化されました。龍樹は、全ての物事は単独で独立して成立しているのではなく、常に変化し、互いに関係し合う（縁起）ことで成り立っていると論じ、この状態を「空」と定義しました。

先程の「アートかクラフトか」について考察する際にも龍樹の考えは示唆的です。そもそも日本ではそのような分別が行われることなく、それぞれが関わり合いながら新たな表現が次々に生み出されていきました。そこに日本文化の真の豊かさがあるのではないのでしょうか。今回の展示を通して、その在り方を今一度見つめ直し、それを世界に訴えかけたかった。

—— そういったテーマに基づいた展示が、西洋文明の象徴ともいえるヴェネチアで行われるのは、意義深いように思います。

「関係の論理」は、ヴェネチア・ビエンナーレのサテライトイベントの一部として企画されています。今回のビエンナーレは、イスラエルやロシアの参加に対する抗議活動が激化し、最高賞を決める審査員団が開幕直前に総辞任する事態に発展するなど、激しい政治的対立が噴出しており、作品もそれを反映するものが多かった。それらの作品は、まさに西洋由来の方法論で平和を訴えかけているわけですが、結果として「分断」や「対立」を

顕在化させています。

「関係の論理」がテーマにしているのはそれとは違い、全ての物事が自分に関係しているという意識を持つことで、自ずと調和に向かう世界観です。この見方が奇しくも象徴的に現れていたように思います。

また、会場である「パラッツォ・ベンボ（Palazzo Bembo）」は、ヴェネチア屈指の名門貴族ベンボ家の邸宅として、ルネサンス期には多くの文化人が集った場所です。中でも、ピエトロ・ベンボ（1470〜1547年）は、近代イタリア語の父として知られ、出版業界とも深い関わりを持っていました。今回、世界的にも高い評価を誇る日本のマンガとのコラボレーション展が実現したのは不思議な縁を感じます。

マンガも文学と対比され、芸術なのかそうでないのか絶えずジャンル分けに晒されてきました。しかし、現代の日本文化を象徴しているのはマンガに他なりません。世界中でマンガは読まれ、それを

—— 会場設計の大本のコンセプトは『Way is us』です。これは、各展示室をつなぐWay（道）が、展示で投げかけられる二元論にとらわれないWay（見方）へと誘うことで、ゲストであるUs（私たち）が作品と地続きに繋がるような設計に思われますが、このコンセプトもお二人によって考案されたのですよね。

そうです。各展示室も、丹青社がこれまで培ってきた内装設計の粋を結集しています。かねてより、ホワイトキューブに規定されない展示の在り方を模索していたので、今回でその答えの一つをお見せすることができたように思います。

—— 各展示室はどのように構成されていたのでしょうか。



Room 7 | The Way of Interbeing—空の道 四代 田辺竹雲齋

—— 現在、ヴェネチアで開催されている企画展「関係の論理」は、B-OWND と特別に関係の深い6人の作家（今村能章、古賀崇洋、酒井智也、高橋賢悟、中村弘峰、四代田辺竹雲齋）の展示に加え、これまで精力的に取り組んできた他のジャンルとのコラボレーションとして、荒木飛呂彦『ジョジョの奇妙な冒険』と茶の湯をクロスさせた展示、さらには活動初期から行動を共にする Art Collective TeaRoom による茶会も実施されています。まさしくこの「関係の論理」がテーマにしているのはそれとは違い、全ての物事が自分に関係しているという意識を持つことで、自ずと調和に向かう世界観です。この見方が奇しくも象徴的に現れていたように思います。

また、会場である「パラッツォ・ベンボ（Palazzo Bembo）」は、ヴェネチア屈指の名門貴族ベンボ家の邸宅として、ルネサンス期には多くの文化人が集った場所です。中でも、ピエトロ・ベンボ（1470〜1547年）は、近代イタリア語の父として知られ、出版業界とも深い関わりを持っていました。今回、世界的にも高い評価を誇る日本のマンガとのコラボレーション展が実現したのは不思議な縁を感じます。

マンガも文学と対比され、芸術なのかそうでないのか絶えずジャンル分けに晒されてきました。しかし、現代の日本文化を象徴しているのはマンガに他なりません。世界中でマンガは読まれ、それを

—— 関係の論理』では、近代的な「分別」の制度を問い直し、東洋古来の「縁（関係）」や「空（くう）」の思想に基づき、分断された価値を再接続しようと試みています。これも「アートかクラフトか」という問題をより一般化して捉え直しているのでしょうか。

その通りです。東洋思想、特に仏教における「空」の理論は、龍樹（ナーガールジ

れまでの B-OWND の軌跡を振り返るような構成になっていますね。

そうですね。B-OWND は発足した当初から、工芸作品をメインに取り扱ってきましたが、その根底には、工芸が美術とは異なるジャンルとして取り扱われていることに対する強い問題意識があります。現代美術は市場で億を超える価格で頻繁に取引されているのに対して、工芸では1,000万円以上で取引される現代作家は稀です。しかし、歴史の厚みに裏付けられた設計思想や高い技術を有する工芸は、美術にも決して引けを取らない優れた造形表現です。にも関わらず現状に甘んじているのはなぜか、真剣に考えれば考えるほど、これまで強固に作用していた二元的な見方を変える必要があると感じたのです。

「アートかクラフトか」、これは B-OWND が絶えず投げかけ続けている問いです。大規模展示や様々な I P とのコラボレーション企画、茶会やサロンなどの複合的な観点で工芸を発信しているのも、この問いに対する答えを提示するためです。

—— 関係の論理』では、近代的な「分別」の制度を問い直し、東洋古来の「縁（関係）」や「空（くう）」の思想に基づき、分断された価値を再接続しようと試みています。これも「アートかクラフトか」という問題をより一般化して捉え直しているのでしょうか。

その通りです。東洋思想、特に仏教における「空」の理論は、龍樹（ナーガールジ



Room 4 | 記憶の積層と解放—「FLAT」な地平へ 酒井智也

Room 1は先程申し上げたように、集英社マンガアートヘリテージとArt Collective TeaRoomとのコラボレーション展になります。

Room 2は、重力と熱という自然法則に委ねる制作プロセスにより、用途と鑑賞の境界を揺るがす今村能章の作品群を提示しています。彼は西洋的な錬金術と東洋的なアニメズムに強い影響を受けているので、東洋と西洋、異なる文化が交差する儀式的場を創出させています。

Room 3では、BOWNDの看板作家である古賀崇洋の「頬鎧盃」をメインに展示しています。「わびさび」の静謐さと「婆娑羅」の華美さを融合させた「NEO WABISABI」を表現する古賀ですが、今回の展示空間では、大量に並ぶ「頬鎧盃」の迫力にアクセントを加えるため、中央にスリットを加えて、コントラストの効いたヴェネチアの光を効果的に採り入れています。

轆轤技法を用いて、意識と無意識の往還を可視化する酒井智也によるRoom 4は、酒井作品の特徴である轆轤による滑らかな曲線美を強調するために、展示空間では直線を全て廃しました。

高橋賢悟を紹介するRoom 5では、数万輪の生花を原型とし、厚さ0・1mmのアルミニウムへ置換する「花鑄込み」技法を用いた頭蓋骨の作品を展示。高橋の精巧な表現を見せるために、あえて作品の点数を絞っています。また、台座も通常より少し高めに設計し、頭蓋骨の目線と来場者の目線が合わさるようにする。

とで、生と死、儚さと永続を行き来し、死を巨大な循環の一部とする高橋の世界観がより真摯に伝わるようにしています。

Room 6を手掛けた中村弘峰は、作家がずっと温めていた展示コンセプトを今回実現しました。伝統的な「雛壇」を転用し、既に絶滅した動物と、今生きている人間と動物を配しています。その先に、ノアの方舟を思わせる作品を展示することで、祝祭と非常事態が同居する空間を構築しています。めでたい雛壇と難を逃れるための方舟、相対する2つの交わりは、空間を彩る赤と青でも表現しています。

最後のRoom 7では四代田辺竹雲斎による大規模なインスタレーションを展開しています。イタリアの歴史的建築物に日本的な竹が侵食し、空間と作品の境界線は溶け合い、あらゆる境界を無化させるような印象を起こします。

——各展示室を通して、様々な対立概念の関係性を見直し、新たな認識体験へと誘うように設計されているのですね。この意欲的な展示の評判はいかがでしょう。

お陰様で、本会場の歴代の来場者数を更新するほどの盛況を取っています。日本文化の力を再確認する結果になったのではないのでしょうか。

Information

Personal Structures 2026

「Relational Logic — Beyond Dualism, a World Reconnected

(関係の論理—二元論を超え、結び直される世界)」

会期：開催中〜11月22日（日）

会場：Palazzo Bembo

(Riva del Carbon, 4793, 30124 Venezia VE, Italy)